

ジャン・ジオノのオート＝プロヴァンス

山本 省

序. ジオノとオート＝プロヴァンス

私たちは自分が気に入っている土地に住み続けるという幸福に恵まれることはあまりない。スコットランドのような雨の多い土地の方が気に入っているが、生まれ育ったオート＝プロヴァンスのマノスクー帯を「スワンがオデットを愛したように愛している」¹⁾とジオノは語っている。「自分が生まれたいと思っていたような場所で、私は生まれた」²⁾と故郷の町セットを形容したヴァレリーが、1994年以降パリに定住したのとは対照的に、ジオノはマノスクに住み続ける。

ジオノが子供時代を過ごし、1920年の結婚を機に転居するまで暮らしていた建物（リュ・グランド14番地）には、ジオノを顕彰して次のようなプレートが取り付けられている。「この建物で、1895年3月30日、作家ジャン・ジオノは生まれた。物語創作という魔法によって、彼は故郷の町に栄誉をもたらした。生涯にわたり住み続けたこの町で、彼は1970年10月9日に死亡した。」³⁾

時どき訪れることのあるパリは自分の肌に合わないと言うジオノは、オート＝プロヴァンスの自然環境を存分に享受することができた。年間降水量が600ミリ程度のこの地方では、水はきわめて重要である。水を育むことになる森林は、当然のことながら、大切にされる。ジオノはラヴェンダーやタイムなどのハーブがいたるところに自生しているこの地方のかぐわしい大気を呼吸し、地元の水や食料を摂取して暮らすことにまさる幸福はないと確信していた。

それ故に、ジオノはその土地のつつましくはあるが平穏な生活と、ときおり降りかかってくる災厄を描写することに力を注いだ。地方都市の豊かさ、各種の自然災害、それを増幅させる人間の想像力（パスカル的な意味の想像力）、以上がジオノに恰好のテーマを提供する。

さらに、その土地に危害を加えようとする人工的な「敵」に対しては徹底的に抵抗し、それを排除しようとした。地域に密着した小説家だからこそ、後述するように、戦争やダム建設や先入観にとらわれた裁判に対して異議を唱えざるをえなかったのである。

精彩あふれる自然に触れると、私たちは生きていること自体に喜びを感じる。自然現象に対して人間の五感が素早く敏感に反応するからである。

ジオノが目指したのは、そうしたむきだしの自然の描写を文学作品の中核に据えることであった。『丘』や『喜びは永遠に残る』の冒頭部分などが、その好例となっている。ここでは『二番草』において、バノン（リュール山麓にある現在の人口約千人の町）に向かう乗合馬車が、人間の社

会から遠ざかり、天空に接しているような「牧神」の領域に入りこんでいく様子が描かれている部分を引用しておこう。

そこ〔ヴァシェール〕からはじまる登り坂は最高に長くて最高にきつい。それが最後の登り坂だということとはみんな承知している。そして、馬や馬車や乗客たちが、風や雲の漂う天空の世界のまっただなかに一挙に持ち上げられるということも分かっている。もう向こう側に下りるとということもない。まず森林のなかを、ついで、すっかり毛が抜け落ちてしまった、年老いた雌犬のように病に触まれている荒れ地を、道は上昇していく。さらに、どんどんと高く登っていくので、乗客たちは翼の羽ばたきが肩に当たるのが感じられるだろうし、止むことのない風の唸りが聞こえてくるであろう。そうしてついに、馬車は高原に辿りつく。そこは大きな匏のような風が地表をくまなく削りとってしまった広大な大地である。速歩で15分も進むと、修道院と50軒ばかりの家の重みで地面が沈下している柔らかいくぼ地状のところに、バノンがある。⁴⁾

人間の世界から遠く離れて暮らしているリュール山麓の集落の住人たちが、自然の災害に翻弄されていく『丘』と、同じく世界から孤立した高原に暮らしている20人ばかりの住民のところに詩人の魂を持った流れ者が住みつき、さまざまな喜びを彼らに伝え、それを根付かせていく『喜びは永遠に残る』を手がかりに、ジオノとオート＝プロヴァンスとの関わりを探っていきたい。さらに、オート＝プロヴァンスでの生活を脅かす戦争やダム建設や納得のいかない裁判についても、ジオノが大胆な発言を繰り返したことを検証することにより、ジオノが故郷オート＝プロヴァンスに深く根ざした作家だったということを確認していきたい。

1. 『丘』(1929年)ーリュール山麓の寒村における住人たちの妄想の高まりー

ジオノが公にした最初の作品『丘』は、アンドレ・ジッドに激賞されたことも幸いして、当時のフランス文壇にきわめて好意的に受け入れられた。オート＝プロヴァンスの片田舎の集落に住む農民たちの生活ぶりや彼らを取り巻く自然を描写するジオノの筆力が斬新だったからであろう。

13人の住人たちは、自然のさまざまな要素のなかでひっそりと暮らしている。物語の冒頭では、この集落を取り囲んでいる自然環境が延々と描写されていく。

屋根瓦のすぐ下までハクサンチドリの花が咲いているように見える4軒の家が、密生した丈の高い小麦畑の向こうに姿を現す。

それは丘と丘のあいだの窪地である。その窪地は大地の肉体が湾曲してたつぷりと盛り上がっているいくつかの丘に囲まれている。

花をつけたムラサキウマゴヤシがオリーブの木々の下で血を流している。幹から甘い樹液を滴らせている白樺のまわりで、小さな蜂たちが踊っている。

泉からふんだんに湧き出てくる水が、2つの水源となって歌っている。岩から落ちてくる水源の水を、風が撒き散らしている。ふたつの水源の水は草の下であえいだから、合流し、イグサが茂っている沢を流れていく。

風がプラタナスをざわめかせている。

それはレ・バスチッド・ブランシュという集落である。

脱穀機が唸りをあげて立ち働いている平原と、野生のラヴェンダーが生い茂っている広大な砂漠のまんなかにある廃墟のような部落。風に支配されているその一帯は、リュールの山々の麓にあるので、冷たい陰に包まれている。

風の大地である。⁵⁾

風に支配されているこの一帯では、雨がそれほど降らない。村にひとつしかない水場は大切に取り扱われている。この地方でもっとも重要な樹木、楢が泉のかたわらに配置されているのもジオノの物語の特徴である。

住人たちの描写に入ると、まず村の平和な光景が紹介される。

今日、ゴンドランはテラスに出る。片手で酒瓶とグラスを2つ持ち、他方の腕で新鮮な水が一杯入った水差しを胸に抱きかかえて運んでいる。そこからズボンまで水が滴り落ちていく。片足でテーブルを整え、水差しとグラスを、さらに注意深く酒瓶をその上に置く。

夏の夕方、6時である。洗濯場の方で誰かが歌っている声が聞こえてくる。⁶⁾

この平穏な村に、黒猫が現れたのがきっかけとなり、次々と予想外の災いが生じる。

牧神の跳梁する世界に暮らしている村人たちが襲った災厄とは、ひとつしかない泉の枯渇、娘にとりついた得体の知れない病、大規模な山火事であった。世界のなかで孤立している集落では、村人たちの妄想は油を注がれた火のようにふくらんでいく。

狼狽のあまり自制心を喪失した住人たちは、今にもあの世に旅立とうとしている80歳を超える老人が、その災害を意図的に操っているのではないだろうかと思いはじめ、自分たちを道連れにしようと企んでいるということに確信を抱くようになり、彼を殺害しようと決めてしまう。

この老人ジャネは、それだけの悪意を疑われるに足るだけの態度を見せていた。寝たきりになっているジャネが、奇妙な動作を繰り返している。娘婿のゴンドランが不審に思い、近づく。

ジャネは指を動かしているようだ。何を戯れているのだろうか？

ジャネはやっとのことで両手を引き出してきた。そして両手をシートの上に並べた。彼は両手をじっと見つめる。見つめている目は驚愕のあまり少しずつ見開かれていく。右手が、ゆっくりと、左手に近づく。

それは成長する枝を思わせるような動きである。つまり植物的な動作だ。

右手は左手をつかみ、握りしめ、引っ張る。左手の手袋あるいは紐を取りはずそうとしているように

見える。それから、ゆっくりと、重々しく、まるでものすごい力で膨れ上がっているように、しかしとてつもなく重いものを持ち上げるのに苦労しているかのように、右手はベッドの縁の方に動き、何かを投げ捨てる仕種をする。そしてその仕種は、そっくりそのまま、まるで機械の動きのように、繰り返される。

ゴンドランは近づく。そこまで近づいてみると、まちかに彼はジャネの手の太い静脈を見ることがができる。子山羊を繋ぎ止めている網のように太い静脈が、手の上で震えている。

「ジャネ爺さん、何をしてるんだね？」

ジャネは木彫りの聖人のように硬直している。瞳を目の隅に寄せる。

「蛇だ」ジャネは言う。「蛇だよ」⁷⁾

このジャネの動作について、ジオノは自分で考え出したものではなく、アルコール中毒の農民がこのとおりの仕種をしているのを利用したまでだと語っている⁸⁾。ジャネは、このあとも幻視者のような言葉をもてあそぶことになる。ジャネのこのような印象的な登場の仕方が、この作品に奇妙な生命感を与えるのに大きく貢献していると私は評価している。

さらに、ガラス玉同然のゴンドランの目には、何も見えていないとジャネは指摘する。自分がたった今投げ捨てた蛇が見えないようでは、「草のなかで雄牛のように寝そべっているの、背中だけしか見えない」⁹⁾ 丘のことなどとても気づかないだろうとも言う。

「それじゃあ、あそこに家や木や丘があるが、そのまわりは本当に空っぽだとお前は本気で考えているのか？家はただの家であって、それ以上のものじゃないと思っているのか？丘は丘で、それ以上の何ものでないとも？」

お前がそれほどの間抜けだとは思っていなかったぞ。

その椅子の下には、ついさっき蛇を3匹投げ捨てたじゃないか。1匹はすっかり緑色の小さなやつで、草の蛇だった。背中には、燕麦の茎が3つ編みにされているような模様がついていた。そいつが指から出てきたとき、何故だか知らんが、『やあ、オーギュスト』と俺に言った。俺の名前はオーギュストなんかじゃない。俺はジャネだよ」¹⁰⁾

普段なら無視できるのであろうが、災厄が相次いで起こり、追いつめられた心境におちいっている村人たちには、うわごとのようなジャネの言葉が薄気味悪く感じられるようになってくる。何か本質的なことを言い当てているようにも感じられるからである。トカゲを犁で断ち切ったゴンドランは、自分は動物や植物を殺し続けることによって生きているということに、はじめて気づき、驚く。うごめくような自然界の営みに不気味さを感じとるようになったジョームとゴンドランは、山のなかの畑まで出かけ、何か異常なことが起こるのではないかと一日中茂みのなかから見張ったりする。

事実、ジオノはジャネに、物事を透視する能力を与えているのである。これ以降のジオノの物語では、こうした超能力を具えている人物が頻出するようになる。

最終的に、ジョームがジャネ殺害の計画を提案すると、娘婿のゴンドランは、ジャネだって人間なのだから……と逡巡を示す。それを論駁するジョームの熱弁は乱暴でありながらも、不思議な説得力を持っている。

「奴は人間じゃない」とジョームは言う。「人間なら、あんたや俺や他のみんなもそうだが、生命に対して敬意を抱いている。吹きつけてくる風に対して小さなランプが消されないように守るのと同じで、いま俺たちには守らねばならない生命がある。俺たちは生命を手のなかで守りながら、その生命を脅かすものを怖がっているということになる。あんたは手のひらのくぼみにちょうどおさまるくらいの小さな熱いひよこを捕まえたことくらい何度もあるだろうが？ 指のあいだにいるひよこを、あんたが少し握りしめさえすれば、簡単に押しつぶしてしまう。そんなことをしようなどと俺たちは思いもしなかったはずだ。それは俺たちが人間だからだよ。奴が手のひらのなかに持っているのは、ひよこなんかじゃない。俺たちなんだぜ。奴が拳を握りしめはじめており、その拳をとことんまで握りしめるつもりだということに、俺たちは今やっと気付いたんだ。そんな奴は、とても人間とは言えない」¹¹⁾

しかし、猛威をふるった山火事もやがて終息し、村にはふたたび平和が訪れる。ゴンドランが手を下すこともなく、ジャネはアルコール中毒による老衰のためひとりあの世に旅立っていった。この地方に点在している小さな集落では、このような出来事が繰り返されているのである。冒頭の場面を再現するかのように、「俺たちの水は素晴らしい」¹²⁾ などと言いながら、男たちは復活した泉の水を注いだアブサントを飲んでいる。

2. 『喜びは永遠に残る』（1934年）—高原の村における喜びの可能性を探る—

ジオノの作品としては『木を植えた男』（1953年）が日本ではとりわけよく知られているが、黙々と木を植えることにブフィエが後半生を捧げるというこの物語は、『喜びは永遠に残る』から自然発生的に生まれてきた作品であると言える。それほど両作品のテーマは似通っている。

『木を植えた男』のなかでこの地方の村の厳しい状態が述べられることになる¹³⁾が、『喜びは永遠に残る』における住人たちもほぼ同じような状況に置かれている。この土地に特有の病気、住人の誰もがかかっている病気がまず紹介される。ジュルダンには55歳の農民である（『木を植えた男』の主人公と同年齢だということを指摘しておこう）。物産市が開かれている広場の一角にあるカフェのなかで、ジュルダンは、そこに集まって談笑している仲間たちすべての心が病んでいることに気づく。

ジュルダンはもっと穏やかな様子の男たちの眼差しを探ってみた。すると、彼らでさえ笑うのをやめると、その目の奥底にはみんな同じような不安の表情がよぎるということに気づいた。不安というよりも恐怖、恐怖というよりも虚無と言うべきかもしれない。それはもはや不安も恐怖もない所なのだ。転

につながれている牛の顔つきである。¹⁴⁾

こうした状態から何としてでも抜け出したいとジュルダンと考えている。『木を植えた男』では、砂漠のような高原を歩きまわっていた「私」の前にプフィエ老人が現れるが、緑の心を持っているような男がやってくるにちがいないという奇妙な確信を持っているジュルダンの前にも詩人ポビが出現する。プフィエとポビは「私」やジュルダンのなかに潜んでいるもうひとりの「私」の象徴であると言うことができる。この間の事情について次のように書かれている。

ずっと前から彼〔ジュルダン〕はひとりの男がやって来るのを待ち望んでいた。それが誰なのか、彼には分からなかった。また、どこからその男がやって来るのかも分からなかった。本当に来るのかどうかも分からなかった。ただジュルダンはそのことを望んでいたのだ。世の中ではしばしばそういう具合に事が進み、人間の希望は大きな奇跡でさえ成就させてしまうことがあるので、このような希望が理由も方法も心得ていない頭のなかに燃え上がったとしても、一向に驚くにはあたらない。¹⁵⁾

ジュルダンの願望は実現し、高原の集落にやってきた流れ者ポビは、高原の住人たちの心のなかに生きる喜びを植えていく。星や森林を見る喜び、半野生の雄鹿を放し飼いする満足感、村人総出のなごやかな宴会の楽しみなどを体験することにより、村人たちは次第に生氣を取り戻していく。

ジオノの物語では、精彩あふれる自然は人間の喜びを象徴する。全編にちりばめられている自然描写には重要な役割が託されているのである。例えば、樹木や風や星が自分に語りかけてくれるような経験を持つことができないのを残念に思っていたジュルダンに、森林がはじめてその秘密を見せる瞬間は次のように描かれている。

柳は、まっすぐ伸びた枝の新芽を次々にふくらませ、葉を開いた。星の光と新芽の光の他には、何もなかった。しかし、他の何にもまして柳の新しい葉は光り輝き、ひとつひとつの新芽のまわりでその葉は、金色に光る枝の樹皮を照らしだしていた。そうすると、柳の周囲には銅色の光輪が少しずつ広がっていった。

「立ち上がるんだ。隈なく見ておかないと」とジュルダンは言った。

あたり一面に新芽が開いていた。すべての木が少しずつ新たな葉に灯をつけていた。まるで月がいくつもあって輝いているようだった。白い光は、榛の木の葉、楓の花弁、ブナの葉、ポプラの苔。金褐色の光は、小さな葉叢が幹を映し出し樹皮のなかに反射している白樺。銅色の光は柳。薔薇色の光はナナカマド。すべてを支配している広範な緑色の輝きは薄暗い葉叢の光であり、松と樅とヒマラヤスギのものであった。

とても新鮮な匂いが漂っていた。砂糖、草原、やに、山、水、樹液、白樺のシロップ、ブルーベリーのジャム、葉の混じっている木苺のゼリー、シナノキの煎じ茶、新しい木工細工品、靴屋のタール、新しいシーツなどの匂いが、混じりあっていた。歩きまわる匂いがあつたが、その匂いはかなり強烈だっ

たので、それが通りかかると葉は閉じた。そうしてその匂いのあとには長い影の航跡ができるのだった。森のありとあらゆる大広間、すべての回廊、柱や丸天井が、静かに照らされて待ちかまえていた。

周囲のどこを見ても、世界という家の魔法のような奥深さが感じられた。

風がぐずついた。

それから風が吹いてきた。

そして森は、その年になってはじめて歌いはじめた。¹⁶⁾

ボードレールの言う「万物照応」の世界である。ジュルダン以外の住人たちも、それぞれ自然のメッセージが聞きとれるようになっていく。さらに、それまで離ればなれに暮らしていた村人たちは、ともに飲み食いし、小麦の収穫を共同で行い、雄鹿の繁殖相手としての雌鹿を生け捕りに出かけた。充実した時間は、時にはプルースト的な過去を喚起する力を持っている¹⁷⁾。住民たちの過去の生活が思い起こされることにより、昔から現在にいたるまで人間の生命が持続していることが強調される。生き生きとした喜びを実感することにより、一見無駄に過ごされてきたように思える人間の過去の時間のある部分に照明が当たり、私たちの内部に生命が脈々と鼓動し続けてきているということが感じられるのである。つまり、喜びを感じるということは、私たちが生きていくということを実感することに他ならないということが明らかになってくる。

ある日曜日の朝、高原のどこからかラッパの響きが聞こえてくる。ボビは自分もまたサーカス団で働いていた頃、ラッパを吹いていたのを思いおこす。

ボビがそこでしばらく眺めていると、ラッパの響きが聞こえた。7つか8つの長く唄れた悲しい音だった。その音は高原の奥から響いてきた。

ボビは草原の霧の彼方を見ようとした。花咲いたアーモンドの木々の薔薇色の斑点しか見えなかった。

ラッパがまた鳴り響いた。最後の音は憂愁を帯びた音色だったので、空の下に力なく広がっている広い高原を思い起こさせた。

「はじまりを告げるラッパだ」とボビは思った。

ボビは、かつて東方の山のなかを巡回したことがあった。ラッパを吹くことしかできない相棒には、ラッパが付き添っていた。しかしそのことはとても重要だった。彼は村々の広場で持ち場について、四方八方に向かってラッパを鳴らしはじめた。彼は高原の悲しいラッパとでも言うべきあの同じ一節をいつも繰り返した。世界の隅々までラッパを鳴り響かせるために、彼は両足を揃えてぐるりと回転した。そうすると、村中の人たちがすべて外に出てきた。そこで、ボビは泉の傍らの自由の楡の木 [1848年の革命のあと、各地に「自由の木」が植えられた] の下にトランプ用の絨毯を広げ、車輪男、ヒキガエル男、太陽男に変身しはじめたものだった。¹⁸⁾

このラッパを合図にして、何の打ち合わせも約束もなかったにもかかわらず、高原の住人たちはジュルダンの家に駆けつけ、即席の大宴会がはじまる。それまで離ればなれの状態で暮らしていた村人たちは、はじめて打ちとけあう。そのあと、互いに自分の夢を語りあったりすることに

よって、急速に人間らしくなっていく。ポビとジュルダンが村人たちの家を歴訪し、自分の喜びを感じることの必要性を巧まずして教えてきたからである。このあたりまで、あるいはもう少し先まで万事がうまく回転していく。

しかしながら、物語のすべてがそれほど楽観的に進展していくわけにはいかない。ポビを恋する少女オロールは自分の恋心をうまく彼に伝えることができない。詩人の心を具えているポビも恋に関してはあまり熟練していないことが分かってくる。ポビを慕うオノレの妻ジョゼフィーヌをポビは受け入れざるをえないからであった。みんなが総出して行われていた小麦の取り入れの最中にオロールが自殺したことから、自分がいる限り高原に平和は続かないと判断し、ポビは激しい雨嵐のさなかに村を去っていく。そして「雷が彼の両肩のあいだに金色の木を打ち」¹⁹⁾こむことにより、物語は完結する。

ポビがまいた種はジュルダンとその妻マルトだけではなく、多くの村人たちに、とりわけジョゼフィーヌに受け継がれることになる。

その夜、彼女は苦しまなかった。彼女が世界からこんなに多くのものを受け取ったことは、それまで一度もなかった。あらゆるものが彼女を支えてくれているように感じられた。あらゆるものから彼女は力を与えられた。夜から、大気から、色彩から、香りから、森の唸りから。今ではポビが百ものやり方で自分と一緒にいるように彼女には思われた。それまで一度も感じたことのない何か確かなものが、そこにはあった。²⁰⁾

つまり、ポビ風の喜びが村のなかに遍在するようになってきたのである。

この物語は多くの読者の共感をかちえた。感動した読者が続々とマノスクのジオノを訪問してくるようになった。物語が展開したような場所がマノスクの近くに存在するだろうと漠然と考えたからである。来客があると、ジオノは30分から1時間程度、自宅のベランダに招き入れるのが常であった。しかし、訪問客は次第に増えるばかりであった。翌年8月末、40名ばかりの愛読者たちとともにジオノは北方のリュール山に向かってピクニックに出かける。この時たどりついたル・コンタドゥールこそ、ジオノが『喜びは永遠に残る』のグレモヌ高原の想を得た高原なのであった。それ以降数年にわたり、年に2回、キャンプのような共同生活が39年まで続けられことになる。「序」で引用した文章のなかで、馬車が向かっていたバノンのさらに北に広がっている高原、それがル・コンタドゥール高原なのである。

3. オート＝プロヴァンスの自然や人間を脅かすものにジオノは断固反対する。

1) 『服従の拒絶』(1937年)、『純粹の探究』(1939年) 一国家一

田舎の住民たちの生活を脅かすものはいくつもあるが、そのなかでもっとも破壊的な影響を及ぼすのは戦争である。4年にわたり歩兵として第一次大戦に参加せざるをえなかったジオノは、今にも戦争が勃発しそうな不穏な空気を読みとり、反戦の文書『服従の拒絶』を、さらに宣戦が

布告されると『純粹の探究』を発表し、国家の意図によって国民がまきこまれる戦争の無意味さ、その欺瞞的側面を徹底的にあばきだそうと試みた。

まず、従軍体験は長期間にわたり悪夢のように参戦した兵士を苦しめるということをジオノは自分の体験から指摘している。

私は戦争を忘れることができない。戦争は忘れたい。時として2日か3日のあいだ戦争のことを考えないこともあるが、急に戦争を思い起こし、戦争を感じ、戦争の物音が聞こえ、ふたたび戦争を耐え忍ぶようになってしまう。そして私は恐怖を感じる。今宵は7月の美しい1日の終わりの時刻である。私の眼下にある平原はすっかり赤茶けている。間もなく小麦の刈り取りが始まるだろう。大気と空と大地は不動で静かである。あれから20年が過ぎ去った。そしてこの20年来、さまざまな苦しみや幸せを体験してきたが、いまだに戦争をきっぱりと洗い流すことができない。あの4年間の恐怖は相変わらず私の身体の中にある。私は戦争の刻印を持ち運んでいる。戦争の生き残りはみな戦争の刻印を押されている。²¹⁾

こうした一連の平和主義的行動の結果、ジオノは投獄される。さらに、数年後、予想もできないことだが、ナチス協力者ということでふたたび投獄される。しかし、書類の罪状の欄には何も記載されておらず、空白になっているのが実情である。

戦争は、国家が企てる途方もない愚行であるとジオノは指摘する。一見すると勇気が要求されるように思える戦争において、必要なのは国家や上官に対する屈辱的で盲目的な服従のみであるとジオノは断言している。

戦争というものは、人間が考え出したさまざまな事業のなかで、男らしさをもっとも必要としない事業なのである。戦争は、最高責任者が発信する命令や命令の取り消しに対する受動的で絶対的かつ無限の服従に基礎を置いている。戦争に参加している者たちが自分たちの自意識や自由や自由意志を、戦争を誘導している者たちの手に委ねるという状況のもとでのみ、戦争は実現する。戦争に参加している者たちが柱や綱や目隠しに震えあがってしまうほど臆病でだらしないという事実があつてこそ、はじめて戦争は続けられ、そして完成されていく。そうした臆病な人間たちの目の前で、見せしめにするために切りつけたり殴ったりする。「さあ、もうこれでお前たちは服従するか？」こう言われ、閉じこめられた人間たちは追いつめられる。罰をちらつかすことによって押し付けられる服従、こういうものは男らしさとか何か関係があると言えるだろうか？戦争はいつでも、老人や資本家や政治家によって構想され、準備され、その幕を切って落とされるものである。つまり、自分が失ってしまった男らしさを後悔している男たちによって戦争が行われるのは明白な事実なのである。戦争を説明するための、それ以外の一見したところ高尚な動機はすべて付随的なものにすぎない。²²⁾

2度の監禁を体験したジオノは、政治的活動の不条理を痛感し、これ以降、政治とは一線を画することになる。共に行動したかつての同士たちの非難や中傷に対して、ジオノは反論や弁明は

ジャン・ジオノのオート＝プロヴァンス

いっさいすることなく沈黙を守り通した。

2) 『ドミニシ事件覚書』(1954年) —公平さに欠ける裁判—

政治にはもう口出ししないと心を決めていたジオノだが、ガリマール社からの依頼もあり、当時オート＝プロヴァンス地方のみならずフランス全土でも大きな問題になっていたある殺人事件の裁判を傍聴することになる。犯人が特定できず、ほぼ迷宮入りの感があったドミニシ事件(1952年にマノスクの15キロほど北に位置している村リュルスにおいて、イギリス人の家族3人が射殺された事件)の裁判で、現場のすぐ近くに住む農民が犯人とされ、死刑を宣告される公判をまちかたで傍聴したジオノは、彼が犯人だとはとても思えない、つまり自分は裁判により説得されたわけではないと主張する『ドミニシ事件覚書』を、判決が下された直後に出版する。ジオノはこの裁判の問題は被告の貧しいフランス語力にあるということと、裁判長や陪審員たちの判断がいかに偏見と思いきみに基づいているかということ、豊富な実例を挙げて明解に指摘した。この地方の農民の生活を知悉しているジオノにしてはじめて書くことができた作品である。

小学校にも通わなかった被告はフランス語を自由に操ることができなかった。扱える語彙もきわめて少なかった。裁判長が被告と交わす会話がいかほどにちぐはぐなものであったかということ、彼らのやり取りを再現することによって、ジオノは次々と証明していく。ジオノの結論は次のようなものである。

私はガストン・Dが有罪ではないと言っているわけではない。彼が有罪だということが証明されていないと指摘しているだけである。裁判長、陪審員、裁判官、法院検事、検事、彼らの誠実さと公明正大さに疑問の余地はない。しかし彼らは被告人が有罪であるという確信をはじめから心のなかに持っていた。彼らの心のなかの確信に私は納得するわけにはいかない、と言っているのである。²³⁾

ジオノの著作が効果的に作用した結果であろう。ドゴール大統領の恩赦を受けたガストン・ドミニシは、1960年、牢から出た。しかし無罪になったわけではない。出獄後すぐに、ドミニシは再審を請求する手紙を大統領あてに送っている。

ジャン・ギャバン主演の映画『ドミニシ事件』(1972年、監督はクロード・ベルナール＝オーベール)はこの殺人事件の真相を明らかにしようとした試みである。ギャバンはジオノの誠実で熱意のこもった著作を読み、ガストン・ドミニシの無罪を信じることができたおかげで、ガストン役をうまく演じることができたと語っている²⁴⁾。

その後、ウィリアム・レモンの忍耐強い調査のおかげで、事件の全貌がほぼ明らかになっている。4人組の男たちが犯人であるということまで突き止められている。彼の著作²⁵⁾をもとに制作された映画『ドミニシ事件』(2003年、ミシェル・シェロー主演、ピエール・ブトロン監督、日本での公開タイトルは「世紀の冤罪」)のなかでは、犯人がはっきりと特定されている。

ガストン・ドミニシの孫(ガストンの2男の息子、アラン・ドミニシ氏)が大統領あてに再審を要求する公開書簡を収めた本²⁶⁾が刊行されているが、残念なことに、その要求が受け入れら

れたとはいまだに聞いていない。

3) 『オルタンス、あるいは清流』（1958年）—ダム工事が自然と人間生活を破壊する—

デュランス河上流のセール＝ポンソンのダム建設（1960年完成）が引き起こすはずのさまざまな被害をいち早く指摘したのが、ジオノがアラン・アリユウと共同で執筆した物語『オルタンス、あるいは清流』（映画『清流』の原作、日本での公開タイトルは「河は呼んでいる」）である。

デュランス河とユバイユ川の合流地点の絶景を、サン＝ヴァンサン＝レ＝フォール（1944年8月から翌年の2月にかけてジオノが収容されていた要塞）から眺めていたはずのジオノは、そこにダムが建造されるという計画を知り、『オルタンス、あるいは清流』によって、ダム建造がもたらす自然破壊と人間生活の攪乱の警鐘を打ち鳴らそうとした。

ダムの建設とともに人造湖の底に沈んでいくのは、集落の家や家財道具だけではない。住人たちの暮らしの習慣、つまり人間の文化が水中に没してしまうのである。さらに、土地買収や工事に伴う各人の損得勘定やねたみなどが、平和だった村を根底から揺り動かす。つまり自然が破壊されるだけでなく、人間の生活も根本から覆されてしまうのである。

亡くなった父親が残したはずの遺産（移転にともなう保証金）の継承者オルタンスをおじさんやおばさん達は何とか籠絡して、彼女から金をせしめようとする。生命に関わるようないくつもの試練をかいぐったあと、オルタンスは山の上の羊飼いのシモンとともに暮らそうと決意するようになる場面で、この物語は終わる。遺産にはまったく関心を示さなかったシモンとともに、清らかな水が流れる高地で暮らすことをオルタンスは選んだのである。

治水と発電の観点から当時は好意的に歓迎されていたと思われるセール＝ポンソン・ダムの建設計画を批判するジオノのこの物語は、オート＝プロヴァンスの自然と住人の生活を守ろうとする一貫した態度のひとつのあらわれであるが、当時はあまりにも画期的すぎたのではないかと想像できる。しかし、自然保護の考えがいきわたっている今日では、ごく当たり前の反応であろう。森林と清流を守ろうとするジオノの態度に揺れはいっさい見られない。ここでもジオノの先見性が明らかである。

結語. 精彩あふれる自然描写—オート＝プロヴァンスに根ざした作家ジャン・ジオノ—

地中海岸から100キロばかり北を南端とするオート＝プロヴァンスの豊かであると同時に厳しい自然環境への愛着と、その土地で質素な暮らしを営々と続けている農民や職人たちへの信頼、両者がジオノ文学を支えている。

オート＝プロヴァンスを舞台とする30あまりの創意を凝らした物語を構築すると同時に、この地方の豊かな日常生活を妨害しようとする外部からの加害者に対して、ジオノはきわめて率直かつ過激に反応することによって、住民たちと自然を守ろうとした。そうすることが、作家としての良心や矜持を保つために最低限必要なことだったからである。

「川や泉は人格である。それらは愛し、騙し、嘘をつき、裏切る。」²⁷⁾ このことに確信を抱い

ていたジオノは人間だけではなくさまざまな自然現象を描くことに全力を尽くす。自然界の生き生きした描写にジオノの本領が発揮される。春の雪融けとともに毎年繰り返される雪崩の描写には、ジオノ文学の精髓が詰まっていると私は考えている。

夜が昼と同じくらい暖かくなってから、高い山々が歌うのが聞こえてきた。雪が融けて、山々から水が流れてきたのだ。谷間の絶壁にぶら下がっていた氷が、雷鳴のような音響をたてて崩れ落ちた。葉叢を取り戻した落葉松の森は傾斜地を豊かにした。氷河を背景にしたとげとげしい空を、牧草地の牧草が和らげた。そして、あらゆる種類のこだまが目覚めた。羊たちが競争したり、大きな白い雌馬たちが駆けまわったりするように、いたるところで小川と急流は跳躍していた。谷間がまだ手のひらほどしか挟まれておらず、悠久の氷の刃が寄りかかっている山のとても高いところから、氷河のいななきが時折り聞こえてきた。氷河はなお一瞬のあいだ不動の状態を保っていたが、そのあと突然その鉄の筋肉をみしみし軋ませて後脚で立ち上がり、解き放たれた雪崩が谷底に向かってギャロップで落ちていった。中央にグレモヌ高原を抱えている広大な地域の静脈や動脈に沿って、小川や急流や川に沿って、土地の奥深いところにある水源地に沿って、新たな水の力の膨張が駆けめぐっていった。

山の音は風に乗って下りてきた。風は方向を変えて、昆虫の脱殻のようにすでにかさこそと音をたてている小麦に覆われた、広大な平原の軋みを運んできた。²⁸⁾

このような自然描写は『喜びは永遠に残る』のあちこちにふんだんに配置されている²⁹⁾。物語の展開と自然描写が見事に共鳴しあうところに、ジオノ文学の妙がある。生命感に満ちあふれ躍動する自然を描くことにより、オート＝プロヴァンスの住人たちの厳しくはあるが豊かな生活が確認できるとジオノが考えていたからである。

注

- 1) Jean Carrière, *Jean Giono, Qui êtes-vous?*, Editions La Manufacture, 1996, p.89.
- 2) Paul Valéry, *Inspirations méditerranéennes*, (Œuvres, tome 1, Pléiade, 1957, p.1084.
- 3) 原文は以下の通りである。Dans cette maison, le 30 mars 1895, est né Jean GIONO, homme de lettres. Par la magie de ses créations romanesques, il honora sa ville natale, où il a toujours vécu et où il est mort le 9 octobre 1970. (原文はすべて大文字で記されており、句読点が一切ないので、筆者が句読点をつけ読みやすく書きなおした。)
- 4) Jean Giono, *Regain*, (Œuvres romanesques, tome 1, Pléiade, 1971, p.325.
- 5) Jean Giono, *Colline*, (Œuvres romanesques, tome 1, p.127.
- 6) *Ibid.*, p.132.
- 7) *Ibid.*, p.137.
- 8) 「この農民はアル中で、自分の手の指から蛇を引き抜いていました。そこから『丘』が生まれてきたのです。私はジャネを見たのです。実際のジャネに付け加えたことは何もありません。」(Jean Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Taos Amrouche*, Gallimard, 1990, p.142)

- 9) Jean Giono, *Colline*, p.139.
- 10) *Ibid.*, pp.138-139.
- 11) *Ibid.*, p.210.
- 12) *Ibid.*, p.217.
- 13) ジャン・ジオノ『木を植えた男』、山本省訳、彩流社、2006年、18頁参照。
- 14) ジャン・ジオノ『喜びは永遠に残る』、山本省訳、河出書房新社、2001年、9頁。
- 15) 同上、6頁。
- 16) 同上、114頁。
- 17) 例えば、84頁、437頁、477頁。
- 18) 同上、141-142頁。
- 19) 同上、528頁。
- 20) 同上、532頁。
- 21) Jean Giono, *Refus d'obéissance*, Récits et Essais, Pléiade, 1989, p.261.
- 22) Jean Giono, *Recherche de la pureté*, Récits et Essais, p.649.
- 23) Jean Giono, *Note sur l'Affaire Dominici*, Journal, Poèmes, Essais, Pléiade, 1995, p.704.
- 24) アンドレ・ブリュヌラン『ジャン・ギャバン』、清水馨訳、時事通信社、1995年、466-469頁参照。
- 25) William Reymond, *Dominici non coupable, Les Assassins retrouvés*, Flammarion, 1992.
- 26) Alain Dominici, William Reymond, *Lettre ouverte pour la révision*, Flammarion, 2003.
- 27) Jean Giono, *Solitude de la pitié*, Œuvres romanesques, tome 1, p.536.
- 28) ジャン・ジオノ『喜びは永遠に残る』、459-460頁。
- 29) 例えば、79頁、81頁、122頁、124頁、134頁。とりわけ、466 - 474頁。